

中島みゆき 夜会VOL.15「夜物語～元祖・今晚屋」進行表

Rel. 2009/3/7

・演出の細部は、大阪公演に準拠しています。

・この進行表の作成にあたっては、筆者自身の記憶によるほか、友人・知人の方々のコメントや、いくつかのブログ・掲示板等の内容を参考にさせていただきました。一人ひとりのお名前や個々のURLを記すことはできませんが、ここに厚く謝意を表します。

・「演出」欄は私的なメモに過ぎませんので、筆者の責任において、重要な欠落や間違いが含まれている可能性があります。気づかれたら、このブログでコメントいただければ幸いです。

・「出典・注釈・解釈」欄は筆者の主観に基づくものですので、当然、多くの異論の余地があるものと想定しています。同様に、コメントいただければ幸いです。

【凡例】 **濃い青の太字**: パンフレットに掲載されている歌詞・台詞 **太字**: 歌詞・台詞
 ()内: 役名

ピンク網掛け: 解釈上とくに重要と思われる箇所

幕	場	曲/台詞	歌手/演者	演出	出典・注釈・解釈
第1幕	第1場 縁切寺	1. 十二天	Instrumental	鐘の音3回。照明が明るくなると、深山幽谷とおぼしき場所にある六角堂(「縁切寺」)が姿を現す。時刻は夜。周囲に欄干をめぐらし、舞台床から正面玄関へは、左右に木製の手すりのある5段の階段。舞台床の手前、客席側には、舞台幅いっぱいに近い4段の階段(やはり左右に木製の手すり)。舞台左右の崖には水が流れ続け、水音がし、水しぶきが立ち、崖下は滝壺となっている。舞台下手の階段下の奈落から、風呂敷包みを背負い、水色の着物を着た(暦売り)登場、境内に商売道具を広げる。売り物の暦(カレンダー)は、「2009」の大きな文字の他は白紙。「SALE」と大書された旗も。	(暦売り)は時空を自在に行き来する旅人であり、(今晚屋)の代理人として登場人物たちの運命を誘導しつつ、物語全体の狂言回し役を務めていると考えられる。カレンダーが白紙なのは、(暦売り)が、時間を自在に操り、「過ぎ去りし過去の日」や「まだ知らぬ先の日」へと暦を動かすことのできる存在であることを意味する。
		2. 暦売りの歌	中島	(暦売り)、正面階段を上がって六角堂の裏手に入り、寺の道具をいくつか持ち出し、売り物に加える。	
		3. 百九番目の除夜の鐘	中島	曲の初めと終わりに鐘の音。六角堂の右裏手から(縁切寺の庵主)(香坂)登場、客席に向かって合掌。	歌詞の「 垣衣 」「 萱草 」は、原作で山椒大夫が安寿、厨子王にそれぞれ与えた名前。事前にウェブサイトやチラシにも掲載されていた歌詞は、この物語が安寿・厨子王の「来生」の物語であることを示す。一般に、除夜の鐘の回数は百八つであり、それは1年間の煩惱の数を、また年が改まることによつてそれらの煩惱から解放されることを意味する。だとすれば、百九番目の除夜の鐘が鳴ることは、煩惱からの解放(「リセット」)がなされず、過去・前生の悲しみが未来・来生へとそのまま引き継がれてゆくことを意味すると考えられる。この曲は、ここを含め第1幕で3回、第2幕で2回歌われ、必ず曲の初めと終わりに鐘の音が鳴る。いずれも前生から転生してきた人物の登場の予告、あるいは前生の記憶の再生の開始を告げる信号の役割を果たす。
		(台詞1)	中島・香坂	(暦売り)、「縁切寺の尼寺で、年越しなんてどうですか」と呼び込みをする。今日は大晦日のようである。近くの寺に参詣している人々らしき話し声も聞こえる。(庵主)、(暦売り)が寺から持ち出し「 どんぶり 」と称して売り物にしようとしていた「 おりん 」を持ち帰る。(暦売り)、(安寿)が出してくれのお茶を飲む。	「縁切寺の尼寺」とは、厨子王を逃走させた後、安寿が入水した沼の畔に立てられたという尼寺をモチーフとしているか。ただし「縁切寺」という設定はオリジナルである。「庵主」は「安寿」と同音であり、そのことから、(庵主)が転生した安寿であるかのようにも思わせる。

4. 夜をください	中島・杉本・宮下	背景の空に満月が浮かぶ。 〈元・画家のホームレス〉(コビヤマ)、六角堂の裏(左側)からひそかに登場、欄干の下(左側)に潜む。 〈曆売り〉、今度は寺から柄杓を持ち出し、商売道具に加える。	月は「夜」の象徴であると同時に、満ち欠けがあることから、輪廻転生の象徴ともみられる。 「 あの子を見捨てて来た水へ戻って待ちたや 約束の 」をはじめ歌詞の内容は、〈曆売り〉が、安寿と厨子王を人買いに攫われてしまった母の転生した姿であることを暗示。
5. 海に絵を描く	宮下・コビヤマ	前曲に続き、背景の空に満月。〈ホームレス〉、縁の下から出てきて、右手に絵筆を持ち、空中に絵を描くかのような、あるいは意志に反して動く絵筆に引っ張られるかのような身振りをしながら歌う。	「 海 」は、人買い舟に寄せられた安寿・厨子王が母らと生き別れになった場所であり、その意味で、思いがけぬ自らの運命の変転を象徴する場所でもある。 「 海に絵を描く 」とは、自らの運命を主体的に切り開いていくことを意味し、それに対し意のままにならぬ絵筆は、前生において、厨子王が主体的にはなく姉・安寿の意志のままに行動したことへの後悔を意味するとも考えられる。
(台詞2)	コビヤマ・中島・香坂	〈ホームレス〉、「置き去りにした人質も、迎えに戻る約束も、約束事はその場の気持ち」と独白。 ついで〈曆売り〉に、「僕、誰ですか?」「名前は何を売っていいのでしょうか?」と尋ねる。 〈曆売り〉がゆっくりと「 わすれぐさ 」と呼びかけると、〈ホームレス〉は「 わすれという名は、引き寄せると 」と応える。 〈曆売り〉が「名前」の代金として1万円を請求。〈ホームレス〉が「 たけ〜! 」と叫ぶと、自らの名を呼ばれたと思った〈庵主〉が玄関から出てきて、「 竹で一す 」と名乗る。	台詞の内容は、〈ホームレス〉が厨子王の、〈庵主〉が姥竹の、それぞれ転生した姿であることを暗示。ただし〈ホームレス〉は、前生での記憶をほとんど失っている。 〈曆売り〉が〈ホームレス〉を「 わすれぐさ 」と呼ぶ点は、〈曆売り〉が母のみならず安寿の記憶をも継承しているかのように思わせる。
6. 旅仕度なされませ	香坂	〈庵主〉、〈ホームレス〉に着物や座布団を渡すなど、何かと世話を焼く。 〈ホームレス〉が〈曆売り〉にぶつかったとき、〈曆売り〉の手から柄杓が飛び、右側の滝壺に落ちる。	「 旅仕度なされませ 」は、姥竹のテーマ曲的な意味づけをもつようである。歌詞の内容や、〈曆売り〉〈ホームレス〉の世話を焼く演出は、姥竹が前生において、母子の道中の世話をする役割であったことを暗示する。
7. 私の罪は水の底	中島・杉本	舞台全体が、水底のような青く揺らめく照明につつまれる。 〈曆売り〉、右側の滝壺から柄杓を探し出す。	「 弘誓(くぜい)の舟は水の底……それぞれ著(つ)く先は同じ彼岸とやら その寺で訊くがいい 」は、人買い舟の船頭・佐渡の二郎が母に言う台詞、「乗る舟は弘誓の舟、著くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が云うたげな」に由来。 なお「弘誓」とは、「生死の苦海を超え、悟りの彼岸にたどりつけて衆生を救おうという仏の誓い」を意味する(『山椒大夫・高瀬舟』新潮文庫版・注解より)。 「 私の罪 」への言及は、やはり〈曆売り〉が母の転生した姿であることを暗示。 「 私の罪は水の底 」という歌詞は、第2幕後半の「ほうやれほ」でも歌われる。また、第2幕全体が水底の「水族館」と思き場所に設定されていることから推して、「 水の底 」とは、意識から抑圧された罪責感や悔恨が保存される無意識の世界を意味しているとも考えられる。
8. 逃げよ、少年	中島・宮下	〈ホームレス〉、六角堂の周囲を逃げ回り、着物などをもった〈庵主〉がその後を追う。〈曆売り〉にぶつかったとき、再び彼女の手から柄杓が飛び、右側の滝壺に落ちる。 逃げ疲れた(?)〈ホームレス〉が正面階段の右に座り込むと、欄干の上から〈庵主〉が布団をかぶせる。	前生で厨子王が山椒大夫の元から逃走した記憶の、不完全な(?)再生を意味するか。

9. 百九番目の除夜の鐘	中島	<p>曲の初めと終わりに鐘の音。 赤い振袖を着たおかつぱ頭の少女(脱走した禿)(土居)、六角堂の欄干下の裏・左側から登場。童女のような無邪気な身振り。 曲後半、〈禿〉は右側の滝壺から柄杓を探し出し、〈曆売り〉の商売道具に並べて置く。それに気づいた〈曆売り〉は驚いた仕草。</p>	<p>2度目の「百九番目の除夜の鐘」。ここでは〈禿〉が初めて登場。柄杓は、安寿が山椒大夫のもとで潮汲みの仕事をしていたときの道具であり、〈禿〉が柄杓を発見するのは、安寿の転生した姿であることを暗示。</p>
(台詞3)	中島・香坂	<p>〈庵主〉が「禿の髪した、女童がいましたか」と尋ね、〈曆売り〉は「艶な着物で、まるで売られた子のような」と答える。 〈庵主〉、「売られた子どもが逃げようならば、ここまで自ら駆け込めば、縁切寺になるものを」と、〈禿〉が「縁切寺」の内部にたどり着けずにさまよっている魂(?)であるらしきことを示唆。 〈庵主〉、〈曆売り〉が〈禿〉から受け取っていた柄杓を「あなた本物持ち出したでしょう、返してちょうだい」と取り返し、持ち帰る。 〈曆売り〉、「約束事はその場の気落ち、売られた子どもは待ちぼうけ」と独白(台詞2の冒頭の〈ホームレス〉の独白に対応)。</p>	<p>禿(かむろ=おかつぱ頭のこと)は、安寿が厨子王と同じ柴刈りの仕事をするようになったときにさせられた髪型。 髪型への言及も、やはり〈禿〉が転生した安寿であることを暗示する。</p>
10. 愚かな禿	中島・杉本	<p>〈禿〉、〈曆売り〉に近づき、なつくような仕草。〈曆売り〉が〈禿〉の着物の裾をめくると、裸足である。 左右の崖の上に赤い光が見えると、〈禿〉はおびえたように、六角堂の裏に隠れる。</p>	<p>「愚かな禿」とは、「愚禿」(親鸞の自称)に由来するか。親鸞は「賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。/愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。」(『愚禿鈔』)と記し、三木清はこれについて、「外には悟りすましたやうに見えても、内には煩惱の絶えることがない。それが人間なのである。すべては無常と感じつつも、これに執着して盡きることがない。それが人間なのである。」(『親鸞』)と述べている(http://members.jcom.home.ne.jp/w3c/MIKI/Shinran1.html)。 『山椒大夫』での安寿は、周到な計画で「内は賢にして外は愚」に装い、周囲を欺くことにより、厨子王を脱出させることに成功し、自らは入水した(と思われる)。「禿は愚かで居るのが良かろう」とは、そうした前生の安寿の運命を繰り返さないように、という母の意志を意味するとも考えられる。 〈禿〉が赤い光に怯えるのは、前生での安寿の記憶、額に十文字の烙印を押された恐怖のためか。</p>
11. らいしよらいしよ	杉本・香坂・宮下	<p>舞台左右の崖に、鞠つきをする少女の大きなシルエットが映る。 〈禿〉、六角堂の欄干の右裏手から再登場、手に持っていた赤白縦縞の紙風船で鞠つきを始める。 再登場した〈ホームレス〉も鞠つきに加わり、やがてバスケットボールのドリブル、シュートのような動きに変化する。</p>	<p>転生した安寿と厨子王が、東の間の再会を果たし、童心に帰って遊ぶ。 「来生 来生 前生から 今生見れば 来生 彼方で見りゃ この此岸も彼岸」は、輪廻転生の死生観・世界観を表現。 曲の前半は、日本各地に伝わる手鞠歌をモチーフにしている(広島地方の「一匁の一助さん」など、題名・歌詞は地方により多様なバージョンあり http://www5e.biglobe.ne.jp/~anjyu/new_page_261.htm, 『わらべうた』岩波文庫、53頁)。</p>
12. ちゃらちゃら	中島	<p>〈曆売り〉、赤富士と多くの赤白縦じまの紙風船が描かれた掛軸を広げながら歌う。紙風船は、赤富士の絵の背景だけでなく、掛軸全体に描かれている。六角堂の裏側から正面階段を伝って床へと、赤白縦縞の紙風船が最初は数個ずつ、やがて無数に転がり出てくる。</p>	<p>無数の紙風船は、縁切寺に封じ込められていた、そこに駆け込んだ人々が捨てた過去の「縁」を意味するか。</p>

13. 憂き世ばなれ	香坂・杉本	<p>〈曆売り〉、正面階段左に移動した商売道具の横で、紙風船を一つずつぶしていく。</p> <p>〈庵主〉、欄干の上から紙風船を一つずつ舞台床に落とし、〈禿〉がそれを拾う。</p> <p>やがて〈禿〉は〈庵主〉について正面階段を上がり、六角堂の裏へ消える。</p> <p>曲の終わりとともに、舞台床にあった無数の紙風船は客席側階段から奈落へと転がり落ちて消える。</p>	<p>縁切寺で再会を果たした(転生した)安寿・厨子王・母・姥竹の、東の間のやすらぎ、あるいは運命への諦観を表現しているように思われる。</p> <p>歌詞「我と我が身がわからない 心もわからない」は、人買い・山岡太夫の舟に乗せられる直前の母の心理描写、「母親は自分が太夫を恐れているとは思っていない。自分の心がはっきりわかっていない」に由来するか。</p> <p>歌詞「どうせ嘘なら葦ひと夜 あとは野となれ山となれ」は、安寿が入水した(と思われる)沼の汀に「枯葦が縦横に乱れて」いたことに由来するか。</p>
14. 夜いらんかいね	中島	<p>舞台背景の空に再び鮮やかな満月が現われる。</p> <p>〈曆売り〉、手に持った紙風船をつぶし、六角堂右の欄干の上から、舞台床に落とす。</p>	<p>ここで、〈曆売り〉は、初めて〈今晚屋〉の代理人の役割を演じる。この〈今晚屋〉の意志の介入によって、「縁切寺」に集った人々の運命が転換し始める。</p> <p>〈今晚屋〉が売る「夜」とは、直接には安寿・厨子王たちが人買いに攫われる前夜を意味しているのだろうが、より一般的には、人々にとって過去の悔恨の出発点であり、そこから運命を再出発させることを人々が望むであろう特別な時間を意味していると考えられる。</p> <p>また、「お代」として要求される「あなたの昼」とは、過去の罪責・悔恨を否定し忘却することによって得られる、現世的・日常的な幸福を意味するか。</p>
15. 百九番目の除夜の鐘	中島	<p>曲の初めと終わりに鐘の音。</p> <p>〈ホームレス〉、六角堂の右裏手から再登場。</p>	<p>3度目の「百九番目の除夜の鐘」。登場人物たちの前生の記憶の全面的な再生が始まることを告げる。</p>
(台詞4)	コビヤマ・中島	<p>〈ホームレス〉、赤白の紙風船をつぶした椀を右手に持ち、「木の椀に、清水を汲んで汲みかわし、門出を祝う水杯を汲みかわし」と独白。</p> <p>〈曆売り〉、「わすれぐさ、都へ逃げよ、疾う逃げよ…都は夜のないところ、目もくらむ眩きところ」と、六角堂の扉を指さす。〈ホームレス〉は頭を抱えながら、「忘れてしまった、忘れてしまった!」と苦しげに言う。〈曆売り〉、「置き去りにせよ、骨肉(こつじく)を!」と、〈ホームレス〉を突き飛ばし、「都」への逃走を促す。</p>	<p>〈ホームレス〉に厨子王の記憶が再生する。また、この場面からは、〈曆売り〉に安寿の記憶が再生しているようにも思われる。</p> <p>原作では、安寿は厨子王を山椒大夫の下から逃走させ、都へと送り出す際、木の椀(まり)に清水を汲み、「これがお前の門出を祝うお酒だよ」と、別れの水杯を交わす。</p>
16. 旅仕度なされませ	中島・杉本	<p>曲は、1回目(香坂・杉本)と異なり、短調で歌われる。</p> <p>〈庵主〉、笠と白装束、黒の衣を取り出し、〈ホームレス〉に着せる。</p>	<p>今回の「旅」が、ある意味では厨子王=〈ホームレス〉の死出の旅、あるいは来生への脱出の旅であることを暗示する。</p>
17. らいしよらいしよ	中島	<p>〈禿〉、六角堂の裏(左側)から再登場、欄干の上で、紙風船で鞠つきを始める。しかし、左右の崖の上に赤い光が見えると、おびえたようにいったん裏手に隠れる。その後、右手に松明を持って再登場。六角堂は内部から炎上し始める。</p>	

		18. 都の灯り	宮下・中島	<p>〈庵主〉と〈禿〉、左右から六角堂正面の観音開きの扉を開く。</p> <p>〈ホームレス〉、白装束の上に黒い衣を着、笠をかぶった姿で、炎上する六角堂の中に入る。扉の向こうに、かすかに「都の灯り」らしき光が見える。</p> <p>やがて六角堂は燃え落ち、〈禿〉は左の滝壺に、〈庵主〉は右の滝壺にそれぞれ身を投げ、片方ずつの藁沓を残す。燃え落ちた六角堂の裏から、消火器を背負った〈曆売り〉が現われ、残された片方ずつの藁沓を拾って一足に揃え、舞台中央・六角堂が燃え落ちた後の階段の上に置く。鐘の音。暗転。</p>	<p>原作では、厨子王を逃走させた後、安寿が入水した(と思われる)沼の端に、藁履が一足残されていた。一方厨子王は、都への逃走の途中、丹後の国分寺に身を隠し、その庇護を受ける。</p> <p>炎上する六角堂の中に入ることが同時に「都」への脱出でもあるということは、「炎」とは「夜のない所」としての「都」、すなわち、過去を忘却し、現世的な幸福を追求しながら未来へと突き進んでゆく、近代化の最尖端としての場所を象徴している、と考えられる(これは第2幕最後の「水」とも対照をなす)。</p> <p>〈禿〉と〈庵主〉が藁沓を片方ずつ残すことは、この二人が、前生での安寿の記憶を半分ずつ引き継いでいたことを意味する。</p> <p>この第1幕全体が、登場人物たちが前生の記憶を再生させることにより、結果的には前生と同じ悲劇的な運命を反復するというストーリーになっている。</p>
第2幕	第1場 水族館	19. 曆売りの歌	中島	<p>鐘の音2回。</p> <p>舞台が少し明るくなると、中央の欄干の上には金属製の物置のような「水族館」、正面の扉の左には配電盤らしきもの、右には「消火栓」と書かれた赤い扉がある。「水族館」の左裏手には、ポンプ設備らしきものも見える。周囲上空には、たくさんのカラフルな魚。</p> <p>第1幕にあった、中央正面の階段左右の手すりはなくなっている。</p> <p>「水族館」の扉から、薄紅色の着物を着、(おそらく第1幕最後に残されたのと同じ)藁沓を履いた〈曆売り〉(中島)が登場。手探りして建物の壁面にある赤色のスイッチを押すと、灯りがとまり、舞台全体が明るくなる。着物が濡れているらしく、藁靴を脱いでひっくり返したり、着物の袖を搾るような仕草。</p>	<p>たくさんの魚は、原作で、人買い舟に攫われるとき「お母様お母様」と叫ぶ安寿・厨子王に対し、船頭・宮崎の三郎が言う台詞「水の底の鱗介(いろくず=魚のこと)には聞えても、あの女子には聞えぬ」に由来するか。</p> <p>この「水族館」全体が水底(海の底)にあり、前生の記憶を封じ込め、保存しておくための装置であると考えられる。</p> <p>消火栓(および〈飼育員〉が背負う消火器)は、第1幕最後の「縁切寺」炎上場面と対称をなし、過去を忘却しつつ未来へと突き進んでゆく「炎」のベクトルを打ち消すこと、すなわち記憶をたえず想起し保存しつつける、過去へのベクトルを表現していると考えられる。</p>
		(台詞5)	中島	<p>〈曆売り〉、「激安ツアーどうですか」と呼び込みをする。手に持った旅行パンフレットの裏はカレンダーになっているが、日付は入っていない。第1幕と同様、今日は大晦日のようなようである。</p> <p>藁沓を脱いで放り出し、客がなくて「曆減らない、全然減らない」とぼやき、「隠し事なら水の底」と言いながら、余った曆を欄干の下に捨てようとする、そこから舞台上空へと急角度で魚が飛び出す。</p>	<p>水は、無意識下に抑圧された前生の記憶、とくに悔恨や罪責感を意味すると考えられる。</p>
		20. 幽霊交差点	中島・杉本	<p>舞台下手に、奈落から大きな透明の魚が浮かんでくる。</p> <p>〈曆売り〉がそれを気にかける仕草をすると、魚も浮き沈みしながら動く。</p>	<p>この「水族館」に集まる人々が、前生の記憶を無意識下に抱えながらさまよっている存在であることを意味するか。</p>
		21. 旅仕度なされませ	杉本・香坂	<p>舞台上手から、ウェットスーツを着て足蹠をつけ、青いバケツを持ち、消火器を背負った〈水族館の飼育員〉(香坂)が登場。バケツから次々と生魚を出し、舞台下に投げる。</p> <p>〈曆売り〉にも、生魚を渡そうとする。</p>	<p>〈飼育員〉が魚たちの世話をする役割であることは、やはり彼女が転生した姥竹であることを暗示するか。</p>

22. 百九番目の除夜の鐘	中島	曲の初めに鐘の音。 「水族館」の屋根に、蛍光灯が灯る。	第1幕と同様、前生の記憶の再生が始まることを告げる。
(台詞6)	中島	〈曆売り〉、欄干から下を覗き込み、繰り返し「 どなたか水の中ですか 」と呼びかける。	前生の記憶を水の中に封じ込めている存在を呼び出すことを意味するか。
23. 安らげき寿を捨て	中島	「水族館」の扉から、ウェディングドレス姿の〈脱走した花嫁〉(土居)登場。 〈曆売り〉、〈花嫁〉が正面階段の上に落したブーケを拾う。	「水族館」の扉や消火栓の赤い扉は、前生の世界からの出入口のようである。 「 安らげき寿 」は、字義により、〈花嫁〉が安寿の転生した姿であることを暗示。 「花嫁」とその「 偽りに満ちた花飾り 」とは、過去を忘却することによって得られる現世的な幸福の象徴であり、「脱走」、「 あてもなき愛に殉ずる 」とは、そうした幸福をあえて捨て去り、自らの過去に再び向き合うことを意味するか。
24. 夜をくだされ	香坂・杉本・宮下	〈花嫁〉、欄干の下、正面階段の裏側に潜む。 第1幕と同様、舞台は水底のように青黒くゆらめく照明につつまれる。	第1幕同様、この「水族館」に集まっている者たちが、いずれも「夜」(そこからの再出発を果たしたい過去の時間)を求めてさまよっている存在であることを暗示。
25. 有機体は過去を喰らふ	宮下・コビヤマ・中島	黄と青が交錯する照明。 消火栓の扉から、緑十字のマークのついた白いヘルメットをかぶり、右手にコテ、左手に金属製のバケツを持った〈左官〉(コビヤマ)登場。 歌詞「 思い上がっていたんだね 」のところで、〈左官〉は重いバケツを持ち上げようとして腰を痛めたかのような身振りをする。 一方、〈曆売り〉は欄干の上で、「花いちもんめ」のような身振りの軽快なダンス。 〈左官〉、曲が終わると消火栓の扉の向こうに消える。	〈左官〉の役柄は、過去の記憶を壁に塗り込めることを意味するか。 「 有機体は過去を喰らふ、有機体は己を喰らふ 」とは、人間も含めあらゆる生命が、有限の環境(生態系)の中で、過去の生命の遺骸(「骨」)を糧としながら生きてゆかざるをえない存在であること、またその意味で、自らの過去をたえず自らの上に累積させながら再生していく存在であることを意味する。 「 思い上がっていたんだね 」とは、絶えず過去を忘却し、現世的な幸福を追求し、未来へと突き進んでゆくことをよとしてきた人間ないし文明への批判を意味するか。 なお、〈左官〉は、律令制の四等官の「さかん」(国司の場合は「目」の字が充てられる)の連想とも解釈できる。ただし、『山椒大夫』では、安寿と厨子王の父・政氏は陸奥掾(じょう、第三等官)、後の厨子王(正道)は丹後守(かみ、第一等官)であり、「目」は登場しない。
26. 私の罪は水の底	中島	〈曆売り〉、消火栓の扉を開けてみるが、ホースなどの道具が入っているだけである。正面階段から舞台床に降り、右側の欄干に5枚ほどの曆を貼りつけていく。	第1幕同様、〈曆売り〉が母の転生した姿であることを暗示。
27. 有機体は過去を喰らふ	宮下・コビヤマ	緑色の照明。 〈左官〉、消火栓の扉から再登場。 照明はエンディングで紫色に変わる。	緑色の照明は、「 有機体 」すなわち生命の環境を暗示。

(台詞7)	コビヤマ・香坂	<p>〈左官〉、〈曆売り〉が欄干に貼った曆をはがしながら、「日付も曜日もないのに曆か?…俺の仕事に変な紙切れ貼り付けやがって、このたわけ!」</p> <p>〈飼育員〉、(第1幕と同様に)自分の名を呼ばれたと思い再登場、「竹でがす」と返事。〈左官〉「訛ってますね。」〈飼育員〉「鉛の弾なら、この通り!」とバケツからピストルを取り出すと、〈左官〉「危ない物は、捨てなさい!」</p> <p>〈飼育員〉「捨てましようとも、山の彼方に。疾う疾う逃げよと、焚き付けて…隠れた私は、水の底。そこ、水洩りしますよ。」</p> <p>〈曆売り〉、「水族館」の屋根の一面を手に持っていたチラシで押さえようとするが、その付近から横向きに水が飛び出し、建物裏側から赤白の紙風船が飛んでくる。</p>	<p>「竹」と名乗るところは、〈飼育員〉が転生した姥竹であることを示すようでもあるが、「疾う疾う逃げよと、焚き付けて」の台詞は、彼女が転生した安寿であることをも意味する。</p> <p>また、〈水族館〉の屋根から水が飛び出す場面は、やはり水が抑圧された記憶の象徴であることを暗示する。</p>
28. らいしよらいしよ	香坂・杉本	<p>〈飼育員〉〈花嫁〉〈左官〉の3人が赤白紙風船で鞠つきに興じ、〈曆売り〉も欄干の上でそれに合わせて鞠つきの動作をする。〈花嫁〉と〈左官〉は、第1幕と同様に、やがてバスケットボールの動きに変化。</p>	第1幕と同様、安寿・厨子王たちの幼時の記憶の再生。
29. 百九番目の除夜の鐘	中島	<p>曲の初めに鐘の音。</p> <p>消火栓の上の赤ランプが点滅を始める。やがて周囲のたぐさんの魚は上方に吊り上げられて消えてゆく。</p> <p>〈曆売り〉、「水族館」の扉を開けて内部に入ろうとするが、どうしても開かない。</p> <p>エンディングで鐘の音3回。</p>	登場人物たちの前生の記憶の全面的な再生が始まる。
(台詞8)	コビヤマ・香坂	<p>舞台前面中央に、赤いライトの交差によって十文字が描かれる。</p> <p>上手に立つ〈左官〉と下手に立つ〈飼育員〉〈花嫁〉、書面を示し、「この十字路は十文字、裏切る手筈の、姉・弟の」と繰り返す。ついで3人は「水族館」の前に立つ〈曆売り〉のほうを振り返り、声を合わせ「額を灼かれよ、十文字」と叫ぶ。</p>	<p>原作では、安寿と厨子王は、山椒大夫の元から逃亡を企てた罰として、額に十文字の烙印を押される夢を見る。</p> <p>〈飼育員〉に安寿の記憶が、〈左官〉に厨子王の記憶が、それぞれ再生し始める。一方、糾弾されている〈曆売り〉は、転生した母であることが示される。</p> <p>ここで「裏切り」とは、原作における山椒大夫の下からの逃走を意味するのではなく、安寿と厨子王が互いに再会の約束を果たせなかったこと、また、母が子どもらを守れず、はからずも人買いの手に渡ってしまったことを意味するものに転換されている。</p>
30. 十文字	中島	<p>〈飼育員〉〈花嫁〉〈左官〉は正面階段を上がり、消火栓の赤い扉の奥に消える。</p> <p>〈曆売り〉、赤いライトの十文字の上を前後左右に辿りながら歌う。「その十文字は何だ」で、客席正面を指さす。</p>	<p>十文字はいうまでもなく「裏切り者」の烙印であるが、「今いる陸は掌の上 その掌に焼き付いている その十文字は何だ」という歌詞は、ここにいう「裏切り」の罪が、必ずしも個々の登場人物についてのものであるだけでなく、人間にとってより一般的・普遍的なものであることを示唆している。</p> <p>「陸」とは、「水族館」のある海底と対比され、日常的な生活の場としての現世を意味するか。</p>

第2 場 船	31. ほうやれほ	中島	<p>〈母〉、舞台手前中央に坐って赤い目隠しをし、長い葦を舞台前縁の隙間から取り出し、右手に持って歌い始める。 欄干の上には、「水族館」は消え、赤く光るたくさんの灯籠が浮かんでいる。 「私の罪は水の底」と歌った後、葦を奈落に落とす。 エンディングの「ほうやれほ」のリフレインに、「百九番目の除夜の鐘」が重なる。 〈母〉は歌い終わると、床に倒れ、暗転。</p>	<p>『山椒大夫』の最後の場面に由来。「ほうやれほ」の歌詞・旋律は、北原白秋作詩・山田耕筰作曲「雀追い」からの引用である(http://www.tei3roh.com/suzumeoi.htm)。 第1,2幕を通じて初めて〈母〉の記憶が全面的に再生し、子を攫われたことへの限りない自責と悔恨が切々と歌われる。 ここからは中島の役柄が〈母〉に変わり、また第2場「船」はここから始まるとみるべきか。 原作の雀追い歌にはない「我が背」(筑紫へ追われた夫・政氏を意味すると考えられる)も歌詞に登場する。このことは、中島みゆきがパンフレットの「まえがき」に提示している、「あの時、母は何ゆえ、あれほど愚かに子を攫われたか」という問いへの答に結びつく可能性がある。すなわち、〈母〉は少しでも早く夫のいる筑紫に辿り着きたいがために、あえて危険な賭と知りつつ、人買い・山岡大夫の誘いに乗ったのではないか、そして〈母〉は後になってその自らの(おそらく無意識の)願望の存在に気づき、より一層の自責の念に苦しむ、という状況がこの場面の含意するところではないかと考えられる。</p>
	32. 十二天	宮下・杉本・ 香坂・中島	<p>舞台の前後上下左右に交錯しながら、次々とスポットライトが灯ってゆく。 1・2番では〈母〉は床に倒れたまま。3番で上半身を起こし、力強く歌う。</p>	<p>前曲での〈母〉の内面世界への求心的視点から一転して、全宇宙の広大な時空のすべてを見はるかすような遠心的な視点が提示される。 この新たな世界観の獲得によって、これまでの物語の空間的・時間的構造のすべて、すなわち陸と海、過去(前生)・現在(今生)・未来(来生)のすべてがその中に相対化され再定位される。 「十二天とは、東西南北と東北・東南・西北・西南の八方を護る諸天に、天・地・日・月にかかわる4種の神を加えて十二天としたもので、伊舎那天、帝釈天、火天(かてん)、焰魔天、羅刹天(らせつてん)、水天、風天、毘沙門天、梵天、地天、日天、月天(がってん)の十二尊からなる。」(Wikipedia) 歌詞の1番・2番(宮下・杉本)では、十二天のそれぞれが、守護する方角を冠して(たとえば「毘沙門天」は「北の天」と)歌われるが、3番(中島)では、十二天のそれぞれがほぼ名前通りに歌われる。ただし最後に歌われる「日の天」「月の天」だけは1・2・3番に共通であり、この2神、とりわけ「月の天」が重要な存在であることを暗示するように思われる(この点は、終曲「天鏡」の意味にもかかわる)。</p>
	33. 紅蓮は目を醒ます	中島	<p>〈母〉、続けて目隠しをし、床にうずくまったまま歌う。歌い終わると、目隠しを外し、薄紅の着物を脱ぎ、白装束となる。</p>	<p>「十二天」で提示された広大な時空を見はるかす世界観の中で、〈母〉は自己の位置を再発見する。すなわち「泥から生まれて泥に住む」矮小な存在としての自己を、「私はここにいる」と再発見することが、罪責・悔恨からの救済と自己再生につながってゆく。 蓮の種子は、土中できわめて長い年月(数百から数千年)、発芽能力を保持することで知られる。「目を醒ます」とは、そうしたきわめて長い時間(「泥」の中で過ごす苦悩の時間)を経ての自己覚醒を意味する。 なお、「紅蓮(ぐれん)」は、「仏教用語において、八寒地獄の七番目である紅蓮地獄の略称でもある。死後そこに落ちた者は、酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮花のようになるという。」(Wikipedia) 紅蓮を含めた四色の蓮の仏教的意味については、中国六朝時代の訳経僧・鳩摩羅什によれば、紅蓮華(パドマ)は行動のエネルギーを、青蓮華(ウトパラ)は沈思黙考を、白蓮華(ブンダリーカ)は純粹無垢の価値を、そして黄蓮華(クムダ)は、月の出とともに開き、徳の中でも穏やかさの本質を、それぞれ示すという。 「紅蓮」(べにはす)は、この仏教的意味を参照すれば、母が過去の限りない苦悩・悔恨を、家族の来生(未来)を救済するためのエネルギーに転化させることを予示するとも考えられる。</p>

	34. 赦され河、 渡れ	宮下・中島	客席に正面を向けた巨大な帆船が降りてくる。舳先には怒れる龍の顔、帆や手すりには多くの赤白の紙風船。奈落から這い上がってきた、やはり白装束の〈厨子王〉〈安寿〉〈姥竹〉が、〈母〉に促され、揺れる船縁に次々と這い上がる。〈姥竹〉は、〈母〉が着ていた紅色の着物を手に持っている。ついで〈母〉は客席に向い、乗船を促すかのような身振りを繰り返す。背景の空には巨大な満月。曲が終わると暗転。	3人を乗せた船は、「弘誓の舟」(前出)か。 「赦され河」を「渡る」とは、過去を忘却し否定するのではなく、むしろ過去のすべての(「赦されざる」)罪や悔恨を抱えたままで、未来(来生)を生きて行くことのできるような境地への到達を意味すると考えられる。 船の上の多くの紙風船は、第1幕の「縁切寺」に封じ込められていた多くの人々の「縁」が、安寿・厨子王たちとともに救済されることを意味する。 第2幕では、この場面で初めて空に月が現われる。このことも、「水族館」が海の底にあったことを傍証しているようである。
第3 場 今 晩 屋	35. 夜いらんか いね	中島	照明が明るくなると、舞台中央には欄干だけが舞台上の舞台のように残り、床には紅毛氈が敷き詰められている。正面階段の手前、舞台床に、白い着物の上に濃藍色の印半纏を羽織った〈今晚屋〉が左横顔を客席に見せて坐っている(ポスター写真と同じ構図)。	ここまでの物語のすべてが、〈今晚屋〉の見せた劇中劇であることを意味するか。
	36. 天鏡	中島	〈今晚屋〉、正面階段を昇り、舞台上の舞台の中央に立ち歌う。 曲中盤から、舞台奥から大量の水が川のように、舞台床上を客席方向へと流れ出す。 歌い終わると、印半纏を脱いで丁寧に畳み、客席に深々とお辞儀。幕。	「天鏡」とは、人間・世界の運命のすべてを映し出す鏡としての「月」を意味するとも考えられる。 流れ出す水は、「涙を湛えた瞳」としての「天鏡」から溢れ出た涙のようであり、「水の底」(無意識の世界)に抑圧されていたすべての過去・前生の記憶が浮上・再生し、過去・前生の罪責や悔恨からの解放・救済がなされたことを意味する。
カーテンコール		全員	「曆売りの歌」(instrumental)に乗り、中島、香坂、コビヤマ、土居、そしてミュージシャン全員が舞台上に登場して挨拶。最後に中島が「良い夜をお持ち帰りください」と挨拶(その他の細部は日替り)。	プログラムに事実上組み込まれたものとしては夜会では初めて、中島の口頭での挨拶入りのカーテンコール。